

平成15年9月4日

平成15年度 第1回 東京都農林水産技術会議水産試験研究評価部会報告

東京都水産試験場

平成15年度第1回東京都農林水産技術会議水産試験研究評価部会が、平成15年7月8日に開催され、平成16年度から新たに開始する下記の3研究課題に関する事前評価が行われました。

記

- (1) 江戸前アユの倍増研究
- (2) フクトコブシ養殖の生産性向上試験
- (3) 水産生物による東京湾奥の水質浄化研究

今回、事前評価を頂いた委員は下記の方々です。

〔研究評価部会委員〕

部会長	竹内俊郎	東京水産大学資源育成学科	教授
	桜本和美	東京水産大学資源管理学科	教授
	中野広	(独)水産総合研究センター・中央水産研究所	企画連絡長
	伊藤正人	東京都漁業協同組合連合会	専務理事
	大谷幸雄	東京都内水面漁業協同組合連合会	代表理事会長
	三田豊一	東京都内湾漁業対策委員会	会長
	酒泉幹雄	都民委員	
	織山修二	〃	

合計8名

江戸前アユの倍増研究

[研究期間] 平成16年4月1日～平成20年3月31日(5年間)

[研究の目的] 多摩川水系(奥多摩、秋川、多摩川中下流域)において江戸前アユの資源量倍増を実現して遊漁者の要望に応えるとともに漁業者、漁協、市区町村、一般都民と連携して「アユネット」を構築し、「海と川をつなぐシンボル」としてのアユを通して、多摩川の河川環の改善を実現し、都民が身近にふれあえるアメニティーの場を提供するとともに、あわせて流域の漁業振興、観光振興に貢献する。

[評価] 総合評価(B)

内訳(地域性:A、公共性:A、緊急性:B、実用性:B、計画性:B、経済性:B)

[所見]

多摩川は神奈川県との境を流れる1級河川である。多摩川水系に東京湾産の稚アユ(江戸前アユ)を増やそうという本研究の趣旨は都民にとって理解されやすく有意義な研究と評価できる。また、最近では、遡上アユの増加は内湾各河川で認められており、江戸前アユの遡上を増やす取り組みは時宜を得た研究といえる。多摩川水系は広範囲に及んでおり、国・神奈川県・流域市町村を巻き込んだ大プロジェクトで、今後の展開が楽しみであるが、関係機関との連携や全体的な役割分担計画への取り組みが必要であろう。遊漁団体にも配慮している点も評価できる。今回は、奥多摩から下流域まで考えているようであるが、実際、全流域の調査研究は可能か。到達目標をどこに置くのかを明確にしておかないと、今後の計画が困難となる。まずは、河川の生産性も含めた河川環境の問題整理が必要であるが、関係機関とも十分話し合い計画を実施して欲しい。都民にも身近なアユを取り上げ、行政から発信することは大事であり、シンポジウムの開催は大変良い。一般住民がアユの遡上増加を体感するまで息切れしないよう研究して欲しい。

[評価に対する対応]

東京都内湾で生息が確認された海産稚アユを多摩川水系上流部まで遡上させるためには、水質や河川の形状などを初めとして多くの問題点がある。これらの点を明らかにして改善策を探るのが本研究の目的である。ご指摘の通り、多摩川水系は流域面積も広く、利用者は漁業関係者だけではなく様々な機関や団体、そして住民が関わっているので研究の実施にあたっては、これらの点に十分配慮する。

フクトコブシ養殖の生産性向上試験

[研究期間] 平成16年4月1日～平成20年3月31日(5年間)

[研究の目的] 八丈島の養殖環境特性を考慮してフクトコブシ陸上養殖の事業化を目指し、養殖期間の一部は海面での垂下式カゴ養殖も組み合わせた生産性の高い養殖法を試験する。

[評価] 総合評価(B)

内訳(地域性:A、公共性:B、緊急性:B、実用性:B、計画性:B、経済性:B)

[所見]

激減したフクトコブシの漁獲量を補完する方法として、本研究の必要性は非常に高い。陸上養殖技術開発では、すでに一定のノウハウの蓄積はされていると思うが、海面垂下式と陸上養殖方式を組み合わせた点で研究の発想は評価できる。事業化を目指した実際的な養殖方法を指向する本研究は、自然・経済条件が厳しい島の活性化策として時宜を得たものと考えるが、実用化・事業化に見合う商品価値の事前調査が必要であろう。また、垂下式かご養殖では、陸上養殖と比べて重量運搬など作業性に難があるので、過重労働になら

ないような配慮が必要であろう。生産量は1.5倍と見積もっているが、両方式併用による収益を含めたバランスシートはどのようなか。他の県や地方でも同様な試みがなされているようであり、事例の詳細について調査し、比較検討することも必要と考える。将来的に、伊豆諸島における漁港利用を想定し、各島の漁港に適した養殖法を考えたらどうか。地域特性も含めて取り組んで欲しい。なお、陸上水槽における種々の試験については研究として価値はあるが、両者の組み合わせの試験は漁家等に委託しても十分やれるのではないか。

[評価に対する対応]

これまでに水産試験場で開発したフクトコブシの陸上養殖技術を活かしつつ、ご指摘いただいた、島内外の市場性の検討も含めて効率の良い養殖カゴ活用、作業の省力化などの視点も取り入れ研究を進める。

水産生物による東京湾奥の水質浄化研究

[研究期間] 平成16年4月1日～平成20年3月31日まで(5年間)

[研究の目的] 東京湾奥の環境に適応した複数の水産生物を活用し、東京湾奥における水質浄化技術を開発する。

[評価] 総合評価(A)

内訳(地域性:A、公共性:A、緊急性:A、実用性:B、計画性:B、経済性:B)

[所見]

人口過密な大都市を背景にした湾奥の水質浄化は永遠の課題であるともいえるが、東京湾奥の水質浄化を図り、都民の憩いの場を提供するとともに、東京湾を再認識してもらう上で、今日的なテーマに積極的に取り組んだ極めて有意義な研究といえる。都民と海をより密接にするため、自然の力を利用しようとの試みは一石三鳥(浄化、レジャー、食材)の効果が期待できる。内湾の水質浄化を図るためには、水生生物の生産(バイオマス)が効果的であり、それを最大限に利用しながらの研究は環境という観点の教育にも貢献できる。浄化が図られると生物自体の多様化も見られるようになるので、計画の後期には甲殻類や魚類の観察も加えてはどうか。東京湾奥の浄化をアピールしながら、各河川の上流に向けた水質汚濁の軽減や防止も訴える方向性も加えて欲しい。ただし、配慮または努力すべき課題としては、内湾浄化関係組織との連携強化、対象とする水生生物の選択と模索、広報の強化(成果や発信)などである。

[評価に対する対応]

本研究の趣旨についてはご理解をいただいたものと考えている。ご指摘いただいた点については、今後、内湾の水質浄化や再生を目指して取り組んでいる関係機関と連携して検討を加え、また、環境教育効果も視点に入れて研究を推進する。